平成６年度 埋蔵文化財緊急発掘調査報告

うなぎ沢・陣馬

平成６年９月

飯　　島　　町
飯島町教育委員会
飯島町土地開発公社

序

うなぎ沢遺跡は、町道中田線の改良事業により飯島町から遺跡調査会が委託を受け緊急発掘調査を行ったものです。

この遺跡の周辺には、旧石器時代の針ヶ平第１遺跡、縄文時代中期の山の神遺跡などがあり、これらの遺跡との関連などかなり期待をもった遺跡でありましたが今回発掘対象となった地域は、開墾時とその後の土地改良事業により土壌の移動が大きく遺構・遺物の確認は困難でありました。

陣馬遺跡は、飯島町土地開発公社の行う宅地開発事業により遺跡調査会が委託を受け緊急発掘調査を行ったものです。

この遺跡の西側には高尾第１遺跡がありこの遺跡との関わりや、地元耕作者の戦後の開墾で土器・石器・黒曜石が出土し現在でも採集できるとの話から遺構・遺物の出土に期待をし、調査面積19,377㎡に68のグリット調査を行いましたが、遺構は認められず遺物も小破片が少数確認されたのみでありました。

両遺跡の発掘調査により今までに発掘調査した遺跡との歴史的位置関係など新たな成果を上げることができましたが、今後の調査に待つ部分も多くあります。

出土品については、今後の学術資料として陣嶺館に保存し、必要により展示して参ります。

最後になりましたが、近年にない連日の猛暑のなか現場で作業に当たられた皆さん、調査に御協力いただいた皆さんに心から感謝申し上げます。

平成６年９月26日

飯島町教育委員会
教育長　片桐　俊

例　言

１．本書は、平成６年度に実施した、うなぎ沢遺跡と陣馬遺跡の発掘調査報告書である。
２．調査は、飯島町と飯島町土地開発公社の委託を受け、飯島町遺跡調査会が実施した。
３．発掘調査、報告書の作成にあたり、研究者・関係機関・地元の方からご指導やご協力をいただいた。
４．本調査にかかわる記録や図版類、出土遺物は飯島町歴史民俗資料館が保管している。

目　次

序
例　言
第１章　調査の経緯……2
　第１節　保護協議と調査体制……2
　第２節　飯島町遺跡調査会と調査団の編成…2
第２章　うなぎ沢遺跡……3
　第１節　位置と歴史的環境……3
　第２節　調査の経過……3
　第３節　遺　構……5
　第４節　遺　物……5
　第５節　まとめ……5
第３章　陣馬遺跡……6
　第１節　位置と歴史的環境……6
　第２節　調査の経過……6
　第３節　遺　物……8
　第４節　まとめ……8
写真図版……9
報告書抄録……表紙裏

第１章　調査の経緯

第１節　保護協議と調査体制

１．うなぎ沢遺跡

平成５年６月23日　町道中田線の設計にあたり埋蔵文化財の保護協議を実施(建設課、飯島町教委)。
７月２日　埋蔵文化財発掘の通知(第57条３)を提出。
９月17日　平成６年度埋蔵文化財保護協議を実施(県文化課、建設課、飯島町教委)。
６年４月28日　埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約の締結(契約金額300万円)。
５月９日　発掘調査開始。
５月19日　現場調査終了。
８月23日　埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約の変更(変更後の金額53万円)。

２．陣馬遺跡

平成５年７月１日　宅地造成工事にあたり埋蔵文化財の保護協議を実施(飯島町土地開発公社、飯島町教委)。
７月12日　埋蔵文化財発掘の通知(第57条３)を提出。
９月17日　平成６年度埋蔵文化財保護協議を実施(県文化課、飯島町土地開発公社、飯島町教委)。
６年５月16日　埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約の締結(契約金額60万円)。
５月17日　発掘調査開始。
５月25日　現場調査終了。
９月２日　埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約の変更(変更後の金額36万円)。

第２節　飯島町遺跡調査会と調査団の編成

《飯島町遺跡調査会》

会長　片桐　俊　(教育長)
理事　桃沢匡行　(文化財調査委員)
川村正彦　(　同　上　)
中村庄司　(　同　上　)
清水幹男　(　同　上　)
小林弘一　(　同　上　)
片桐和見　(　同　上　)
中島淑雄　(　同　上　)
三石　繁　(　同　上　)
幹事　箕浦税夫　(社会教育課長)
伊藤　修　(文化係長)
丸山浩隆　(文化係主事)
小林幸子　(文化係嘱託)

《発掘調査団》

団　長　片桐　俊　(教育長)
調査員　伊藤　修　(文化係長)
調査補助員　北原政和　(飯島町)
指導・助言　寺平　宏、気賀沢　進、赤羽義洋
調査協力者　片桐一雄、佐々木敏郎、上沼秀男
片桐信男、横田三夫、片桐　豊
松村宗治、山田一夫、小林武雄
近藤光春、北原静恵、伊藤たけ
藤井イナエ、米山宇一、唐沢利子
松田　雅、米山ともえ、大石文夫
(※調査協力者は、社団法人駒ヶ根伊南広域シルバー人材センター会員)
写　真　唐木孝治（遺物）

第２章　うなぎ沢遺跡

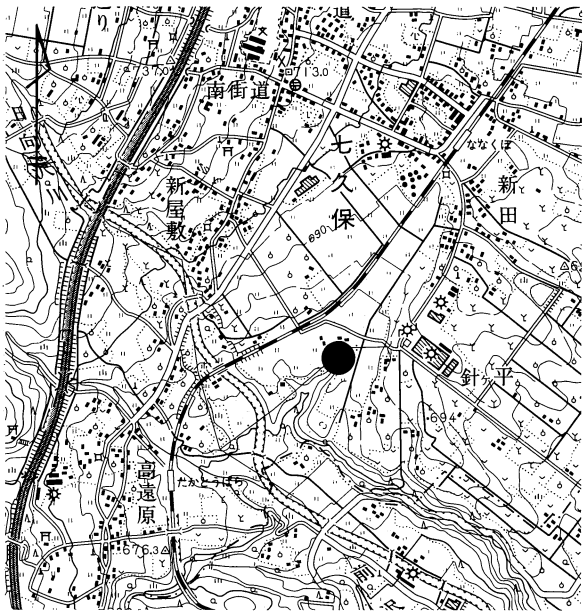
第１節　位置と歴史的環境

１．遺跡の位置

遺跡は、飯島町七久保331番地27外にある。

西方山ろくから東にゆるやかな傾斜で広がる扇状地は、新田・針ヶ平地籍の丘陵部に接する地域（断層）で大きく南に傾斜するくぼ地となり、うなぎ沢川を形成し、南流して一段低い中川村上前沢地籍で、日向沢川と合流している。

遺跡は、このうなぎ沢川左岸の台地上に立地する。



第１図　位置図（１：25,000）

２．歴史的環境

うなぎ沢遺跡は、昭和31年発行の『上伊那誌資料２七久保』に既に掲載された遺跡である。

土器や石器の採集の報告がされていて、出土地点は確認できないが、槍先形尖頭器の発見は特筆される。

また周辺の遺跡として、旧石器時代の針ヶ平第１遺跡、縄文時代中期の山の神遺跡などがある。

３．層　序

遺跡は、開田時とそれ以後の土地改良事業による土壌の移動で大部分が壊されていた。

基本層序は、上面からⅠ耕作土、Ⅱ埋土、Ⅲ黒色土、Ⅳ褐色土、Ⅴソフトローム層で深掘りか所では、ソフトロームの下層にⅥ灰色土、Ⅶ灰褐色土層が見られた。Ⅵ、Ⅶ層については、土壌の鉱物分析での割合は、**御岳三岳テフラよりも上部の火山灰＞基盤岩風化物**　で下層にいくに従って基盤岩風化物の割合が多くなった。

遺物の包含層は、Ⅰ～Ⅳ層であった。

第２節　調査の経過

５月９日（月）　発掘調査開始。グリット調査５か所。その後重機によるトレンチ調査（１号トレンチ）。

５月10日（火）　重機による表土除去、南側水田を中心に調査（Ａ地区）。

５月11日（水）　午前中調査、ローム面での遺構確認。

５月13日（金）　調査地区を北へ可能な限り拡張する。

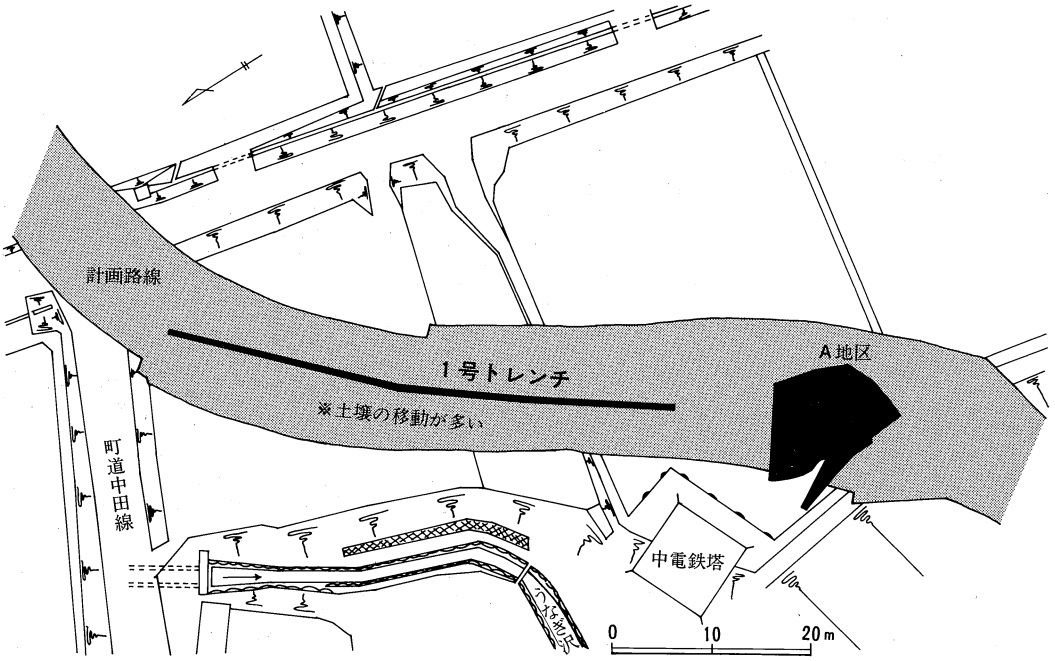
５月14日（土）　地層のサンプル採集（寺平　宏氏）。

５月16日（月）　ピット等の調査、全体調査。

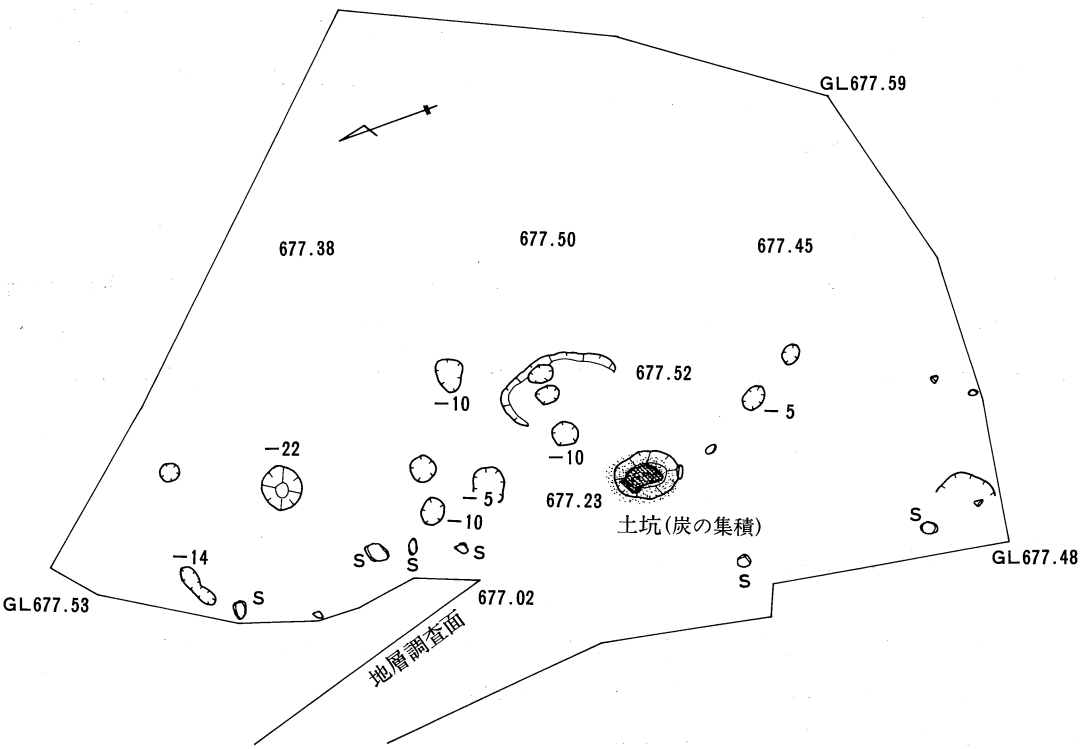
５月17日（火）　赤羽義洋氏来町、遺構について検討する。遺構がいま一つはっきりしないため２か所トレンチを入れ様子をみた後、全体にローム層上面まで削る。

５月19日（木）　調査地区内の最終調整と清掃。写真撮影。

５月20日（金）　測量。現場終了。



第2図　調査地点図



第3図　A地区遺構分布図（1：120）

第4図　出土土器拓影（1：2）

第3節　遺　構

水田の地場下の黒色土（Ⅲ層）、褐色土（Ⅳ層）の残っている範囲で遺構の検出を行なった。

出土した少量の土器片は縄文時代早期末と考えられ、同時代中期と考えられる土器片も無いことから、早期末の単一時期の遺跡と想定し、褐色土層面での土の変化に注意し調査を進めた。

この時点で、炭の小片の散在と直径30～60cm程の円形やだ円形のピットが確認（第3図）され、調査地区西端の傾斜面で市田花こう岩の自然石が見られた。

ピットの覆土を取り除く作業を行なったが、人為的なものと確証できるものはなく、全体にわたって炭の含んだ褐色土（Ⅳ層）を削りソフトローム層（Ⅴ層）上面で、再度遺構の確認を行なった。

土坑（炭の集積）中央やや西よりの傾斜面に、平面がだ円形のソフトローム層へわずか掘り込まれた土坑が確認され、100cm×80cm厚さ2cmの炭の集積があった。焼土、集石、遺物は確認されなかった。

第4節　遺　物

1．土器

土器片は総数59点で総べて小片であった。この内、器面に文様が施された土器片は10点で、残り49点は無文であった。無文の土器片は、1cm前後の小片で、無文帯の部分のものがかなりあると考える。

土器片全体に共通する点は、表面観察から推察するに元の位置からかなり移動したと思われることと、厚さ3～5mmの薄手で胎土に石英・長石の細粒や雲母が含まれ、植物繊維を含むものが多くみられた点である。

特徴的な土器片としては、絡条体圧痕文系土器片（第4図2）と波状口縁で口唇上と口縁下に爪形文の施文のもの（第4図1）である。また繊維を若干含み内面に条痕のある土器片（第4図3）もみられた。

2．石器

石器の出土は少なかった。磨石は3点（砂岩製2点、花こう岩製1点）出土し、いずれも平面形状は円形に近く、長軸8.5～10cm、厚さ3～4cmであった。また石鏃2点、スクレーパー1点が出土した。

調査においては、黒曜石等の剥片も丹念に採集したが、その量的割合はおおよそ黒曜石60%、チャート30%、その他10%であった。

第5節　まとめ

うなぎ沢遺跡は、第1節の歴史的環境で述べたような点でかなり期待がもたれて、発掘調査を実施したが、開田時とそれ以後の土地改良工事で大きく土壌の移動がされ、遺構・遺物の確認は困難であった。

調査は比較的保存状態の良いうなぎ沢沿いを中心に（A地区）実施した。土器は少量・少破片で石器も少なく、出土の状態から遺物はかなり移動しているものと思われて、遺跡が存在したとするならば、その中核は調査地区外の東南地域ではなかったかと考えた。

出土した土器片の中に飯島町内にごく一般的にある縄文時代中期の特徴を持つ物はなかった。恐らくその多くは、縄文時代早期末から前期初頭と考えられ、この時期の単一遺跡である可能性が高い。

当町においては、時期的に近い遺跡としてカゴ田遺跡（柏木）、高尾第2遺跡（高尾）がある。この2遺跡とうなぎ沢遺跡の関連について明らかにすることが、今後の課題であると考える。

第３章　陣馬遺跡

第１節　位置と歴史的環境

１．遺跡の位置

遺跡は、飯島町飯島3856番地33外にある。

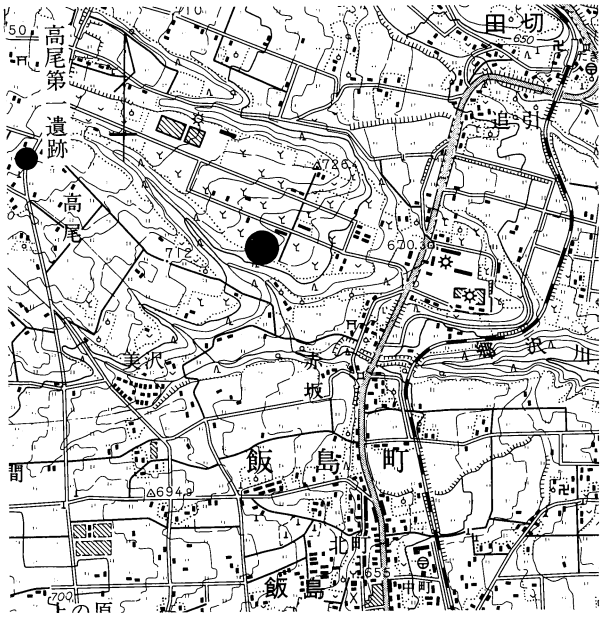
郷沢川とオオシガ沢に挟まれた東西の長い台地は、中央アルプス山麓に始まり、先端部は国道153号線付近の断層崖で終わる。台地はゆるやかに東に傾斜し、先端部近くには、中央部に東へ向って走るくぼ地がある。

遺跡は台地先端部のくぼ地周辺に立地する。

２．歴史的環境

遺跡は、現在桑園・畑地となっており開墾当時から土器や石器が採集された。また『長野県史』には加曽利Ｅ式土器、打製石斧、磨製石斧の出土の掲載がある。

当該遺跡の西、約1000ｍの同じ台地上には、縄文時代中期の大集落であった高尾第１遺跡がある。



第５図　位置図（１：25000）

３．層　序

基本層序は、Ⅰ耕作土、Ⅱ黒色土、Ⅲローム層で、尾根上の堆積の少ない所では、Ⅱ黒色土がみられなかった。表土からローム層までは、20～70cmで、30cm前後の所が多い。

調査地区は、長いも栽培の畑が多く、ローム層まで、かなりかく乱されていた。

第２節　調査の経過

調査面積19,377m²に10ｍメッシュを設定し、その一角（２ｍ×２ｍ）を調査（グリット掘）した。

グリット数は68を数える。

５月16日（月）　発掘調査を開始。調査対象地区が広いために、10ｍメッシュを設定しグリット掘とする。No.１～４グリットを調査。ローム層まで浅く遺物は無かった。

５月17日（火）　No.５～12グリットを調査。耕作土から土器片が数点検出された。

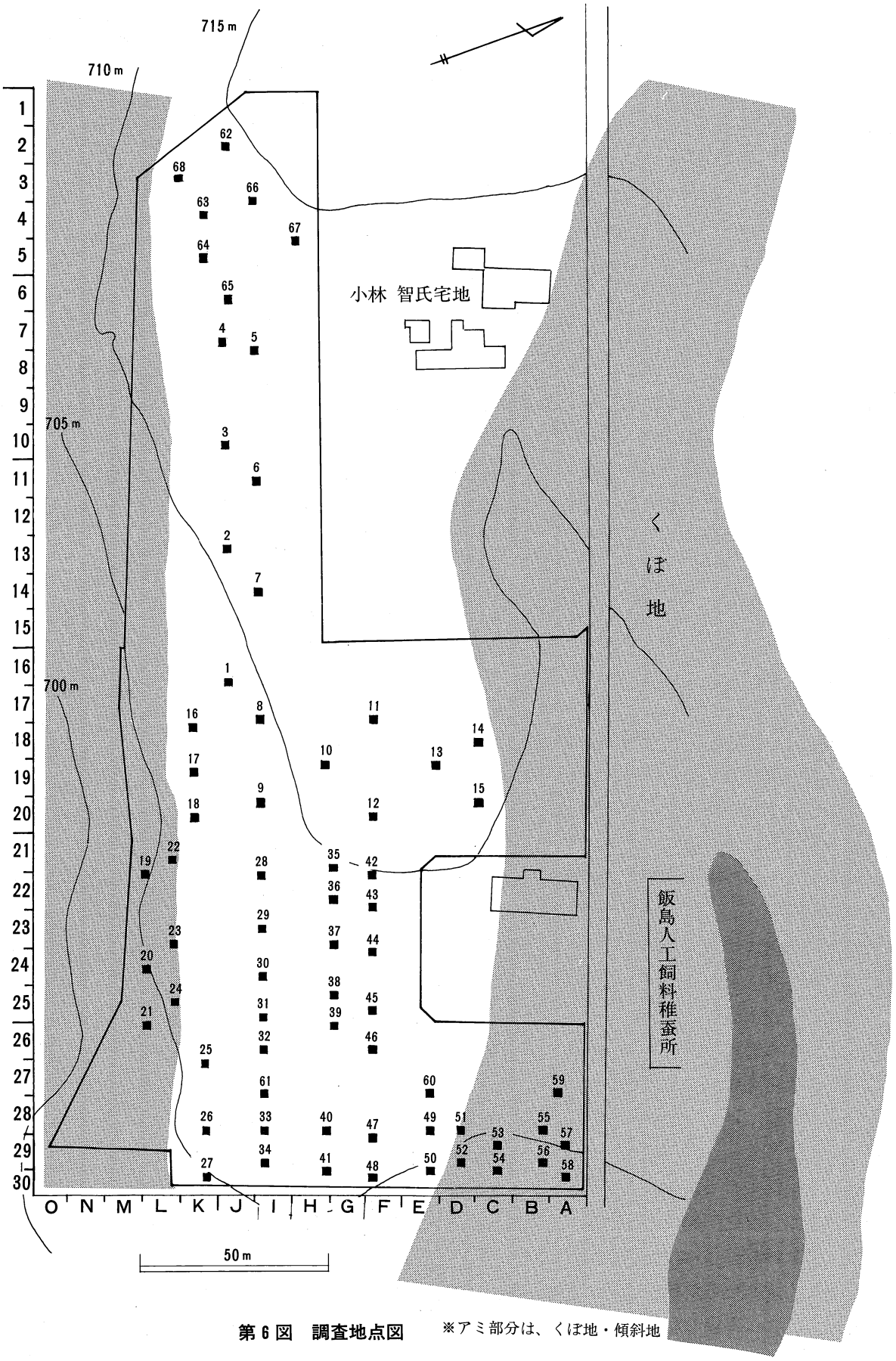
５月19日（木）　No.13～24グリットを調査。ローム層まで浅く遺物は無かった。

５月20日（金）　No.25～34グリットを調査。ローム層までの深さは平均で30～40cm。遺物は耕作土より数点検出された。

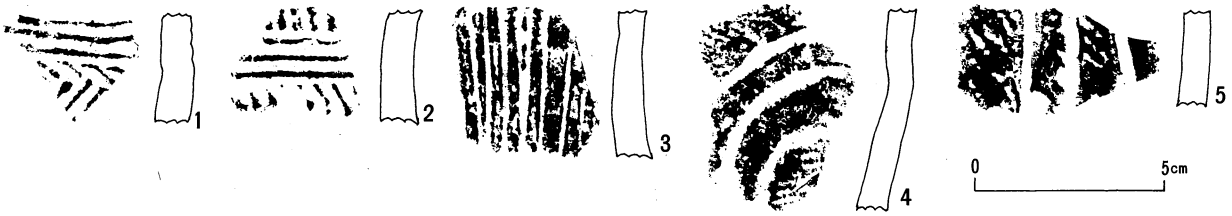
５月23日（月）　No.35～45グリットを調査。ローム層までの深さは平均で30cm。遺物は、土器片数点と打製石斧が検出された。

５月24日（火）　No.46～58グリットを調査。北へ調査を進めるほど黒色土のたい積が深く、ローム層直上で砂が多くみられた。

５月25日（水）　No.59～68グリットを調査。遺物は無かった。
調査地区周辺の地形観察を行ない現場作業を終了した。



第 6 図　調査地点図　※アミ部分は、くぼ地・傾斜地



第７図　出土土器拓影（１：２）

第３節　遺　物

遺物の出土は、調査開始直後に行なった表面採集とグリット調査の耕作土層中のみであった。

１．土器

土器片は総数30片で、いずれも数cmの小破片であった。表面や割れ口から、かなり風雨にさらされたり移動したことがわかった。土器の文様から縄文時代中期初頭（第７図１・２・３）と中期後葉Ⅳ期（第７図４・５、『長野県史』編年）に大別できるものと思われる。

第７図１・２は半截竹管状工具により幾何学的な文様が施されている。３は半截竹管状工具で縦に施文され、沈線の間はヘラ状工具による細かな刺突が見られる。４は縄文と沈線の組み合わさった磨消縄文土器である。

２．石器

打製石斧４点、磨製石斧１点、横刃形石器１点の計６点を検出した。

第４節　まとめ

陣馬遺跡は、縄文時代中期の大集落遺跡である高尾第１遺跡から東へ約1000ｍほど下った同一丘陵上に位置する。陣馬遺跡付近では、丘陵の両脇を流れる河川は低く離れ、現在は水の便の悪い丘となっている。しかし、遺跡周辺の地形を詳細に観察すると、かまぼこ状の丘陵上を小さな沢が作った東西のくぼ地が数筋あることがわかった。

地元の方や耕作者の話では、戦後の開墾で土器・石器・黒曜石が出土し、現在でも少量ではあるが採集できると言う。

今回の調査の最大の課題は、高尾第１遺跡の集落の範囲がここまで及んでいるのかという点と両遺跡に関連性はあるのかという２点であった。

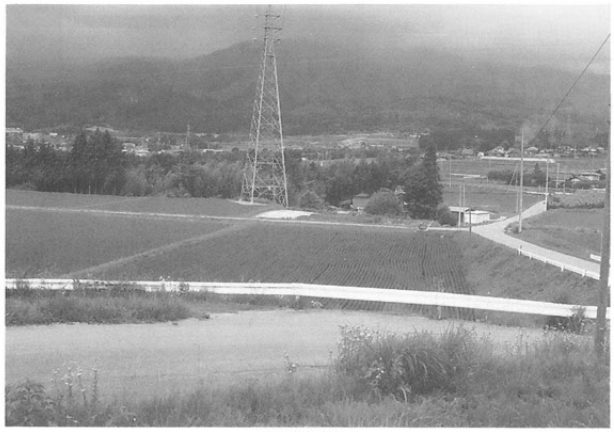
調査地区が広範囲であるため、調査は遺物出土の報告のある地域と遺跡の立地に適した地域を中心にグリットにより行なった。北東部を除き表土からローム層までは平均で30～40cmと浅く、また80cm間隔で農業機械による深耕が行なわれていた。

調査の結果、縄文時代、弥生時代の包含層と考える黒色土からは遺物は確認されず、ローム層面での遺構も検出されなかった。しかし耕作土層や表面から少量ではあるが土器片や石器が採集されていることから、調査地区内の一角かあるいは地区外に遺構があったことは間違いないものと考える。

それについては、過去の出土報告と地形上から考えて、小林智氏宅北側から飯島人工飼料稚蚕所を結ぶ沢（現在はくぼ地）の周辺が最も有力でないかと思われる。

なお出土遺物から、陣馬遺跡の時期は縄文時代中期初頭と後葉Ⅳ期と考え、高尾第１遺跡の井戸尻Ⅱ期～曽利Ⅲ期とは重複しない。したがって、両遺跡の関連性はないものと考えた。

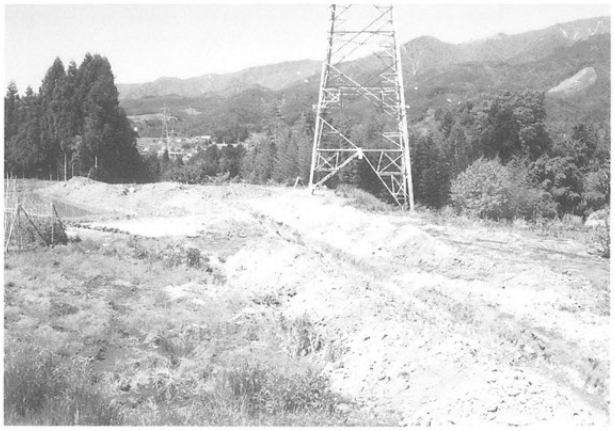
写　真　図　版



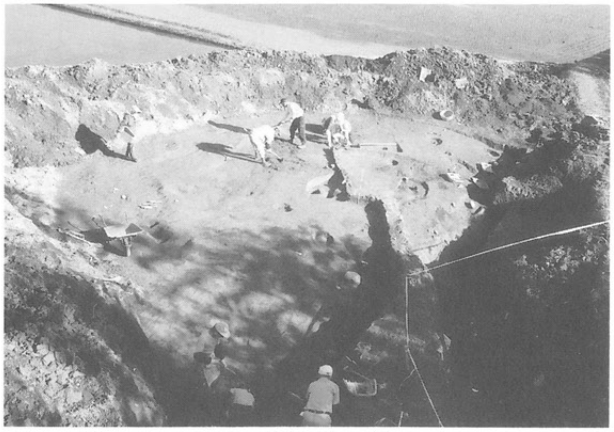
遺跡遠景

遺跡近景

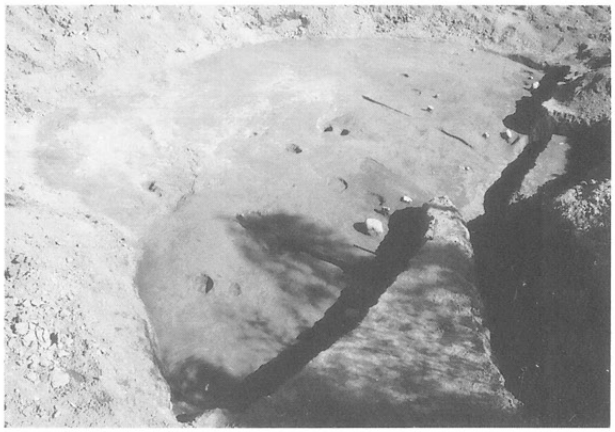
A地区より東南の丘陵を望む



1号トレンチ調査(東より撮影)



A地区調査風景



A地区遺構

土　器

石鏃・スクレーパー

磨　石

図版2　陣馬遺跡

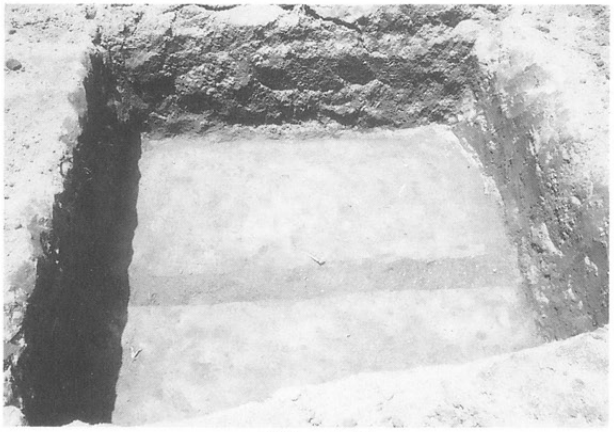
遺跡遠景(北西より撮影)

グリット調査(メッシュ28～30列の中央付近)

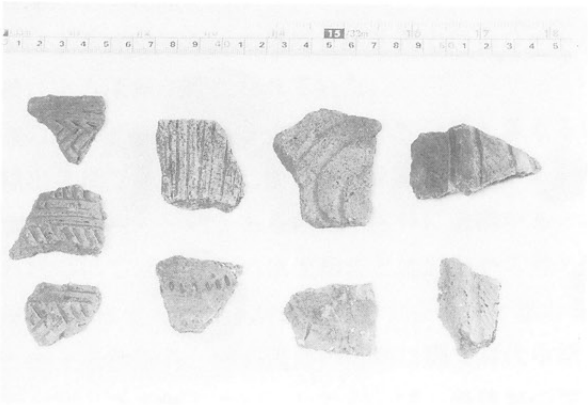
グリット34から西を望む

グリット調査(メッシュ29～30列の北側)

調査風景



グリット51



土　器

打製石斧・磨製石斧・横刃形石器

報告書抄録

ふりがな	うなぎざわ　じんば
書名	うなぎ沢、陣馬
副書名	平成6年度 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	伊藤　修
編集機関	飯島町教育委員会
所在地	〒399-37 長野県上伊那郡飯島町飯島2442の4　Tel 0265-86-3111
発行年月日	西暦1994年9月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
うなぎ沢	ながのけんかみいなぐん 長野県上伊那郡 いいじままちななくぼ 飯島町七久保 331－27外	203840	87	35度 38分 40秒	137度 54分 35秒	19940509～ 19940519	200	道路改良に伴う事前調査
じんば 陣馬	いいじままちいいじま 飯島町飯島 3856－33外	203840	18	35度 41分 15秒	137度 55分 30秒	19940516～ 19940525	272	宅地造成に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
うなぎ沢	散布地	縄文時代 早期末	土坑 (炭の集積)	土器片　59点 石器　6点	
陣馬	散布地	縄文時代 中期	なし	土器片　30点 石器　6点	

平成6年度 埋蔵文化財緊急発掘調査報告

うなぎ沢、陣馬

発行　平成6年9月26日
発行者　飯島町
飯島町教育委員会
飯島町土地開発公社
印刷　㈲宮沢印刷